「小説は面白くってはいけない」

～なぜ自然主義文学を読むのか～

山本　歩

一

〈自然主義文学〉、というと、筆者の講義を受けた学生は、「あれね」と思うだろうか――それとも全然思い出せないだろうか――「あの、あれ、つまらない、細かい、読みづらい」。〈自然主義文学〉、そのほとんどはあまり〈面白い〉ものではない。絶対評価としては面白がれる部分がなくもないが、比較して谷崎潤一郎など、いわゆる反自然主義の文学を読むと、ああやはり谷崎は面白いなあと思ってしまう。相対評価としては〈面白くない〉。

ヨーロッパ自然主義に触発された〈日本自然主義文学〉は、日本近現代文学の歴史を語る上で避けては通れない用語である。けれど一方で、既に過去のものとして、ともすれば批判や反省の対象として語られがちである。授業でこれらの――島崎藤村、田山花袋、岩野泡鳴、徳田秋声、正宗白鳥、真山青果らの――作品を扱う際には、面白くない、難解だ、といった感想を覚悟しなければならない。感想に物怖じする必要もないのであるが、文学史的な位置づけや意義のみに基づいて作品を論じるばかりで良いとも思えない。また、文体発展史として、自然主義を自然主義たらしめた描写法・構成法といった部分を強調することのみでは、作品それ自体への興味は促進されない。いずれも、作品を通読する意義や意志を奪いかねないものだ。

現時点で〈面白くない〉という意見が聞かれているわけではない。例えば二〇一八（平成三十）年度前期、文化言語学部文化言語学科で実施した講義『日本近現代文学史Ⅱ』においては、明治四十年、及び自然主義文壇形成期の作品として徳田秋声『絶望』

（一九〇七年十二月）を取り上げた。中間期に任意の作品で教場レポートを書かせた結果、『絶望』を選択したのは受講者二十九名中三名だった[1]。

秋声『絶望』について、三人中二人が登場人物「お大」の「口調」「言葉遣い」の荒さを指摘している[2]。そこから、性情においても「だらしのない人」であるという人物像への注目と「現代にもこういう人間がいる」という現在・現実の再確認へ接続される、あるいは自然主義についての知識をもとに「当時のありのままの言葉遣いなのだろう」と推論が行われるなどした。また、「人の服装や周りの景色など細かいところまで描いていた」ため「想像しやすく、現実的」に思えたという意見も見られた。

これらの感想はむしろ好意的なものと捉えるべきだろう。だが同時に作品を構成する部品への感想に留まっているとも言える。そして、〈面白くない〉という感想は、多く表明されず、心中に秘されるものであろうし、実際に秘している学生は少なくあるまい。

自然主義以外の近代文学に目をやれば、学生が面白いと思えるものも多かろう。だが、〈自然主義文学は面白くない＝読みたくない〉という忌避が、〈近代文学は面白くない＝読みたくない〉という忌避に繋がるまで、いくらの距離もないように思える（本学科の学生たちが、江戸川乱歩や谷崎潤一郎、宮沢賢治への興味を未だに保っていることの方が、本来異質なのかも知れない）。

〈面白くない〉ことを承知した上で、それでも自然主義文学を読ませるとすればなぜなのか。言い換えれば、今日の学生たちに、自然主義文学を通して伝えられることは何なのか、本稿で模索してみたい。けれど、あらかじめ述べておけば、〈面白くない〉という観念に、いや面白いのだ、などと反駁しようとは思わない。つまり自然主義文学の面白さといったものを、ここに説くつもりはない。そうではなく、〈面白くない〉ものは〈面白くない〉ままに読んでしまう、ということを考えるべきだろう。

二

日本自然主義内部の諸相を詳しく述べる紙幅はな

いが、単に観察したものをありのままに描写する、というだけのものではない。遺伝や本能を強調し人間を一種の動物として描く傾向。隠された実相を暴露するという「告白」の様式や、作家自身の身辺を題材にとる取材方法。そして、事物を善悪の価値判断（作者の主観）を交えず客観し、「無理想」「無解決」のままに作品化するという長谷川天渓の理論――特に、身辺の題材化や、価値判断を排する「無解決」の提唱は、描写や内容に客観性を与える一方、感動的な偶然や劇的な決着を盛り込ませない方向に、つまり作品の着想やプロットから、非日常を奪う方向に機能したようだ。

自然主義の宣言として有名なのが田山花袋の評論「露骨なる描写[3]」だろう。花袋は言う、「所謂技巧を蹂躙するに非ざれば、日本の文学はとても完全なる発展を為すことは出来ぬ」と。この「技巧」は「文章の妙」「辞句の豊富」という美文的傾向、「思想の華麗」＝詩的な着想や哲学、「結構の妙」「脚色の奇」＝構成・プロットへの注力などを指す。

花袋は『蒲団』（一九〇七年九月）以降、こうした態度を先鋭化させながら、自らが編集長を務める雑誌『文章世界』で、あるいは自然主義文壇の拠点的役割を持つ『早稲田文学』で、青年たちにこうした主張を開陳していく。そういった中に、かなりに無造作ではあるが「面白い」という言葉が用いられ、ストーリーテリングと共に否定されていくのだ。

「世間では今の自然派文芸が面白くなくなつたとか」言い、「官能的な、刺戟的な」ものを求めるが「現実はつまり平凡ではないか[4]」と述べてみたり、「人間の生活は生活してゐる状態そのものが価値があるので」、それを描く小説も「筋」「形式」を重んじる必要はない、というようなことを大正時代に入っても言っていた[5]。

『文章世界』では懸賞小説の選者も務めたが、その選評においても、面白い小説への慎重さをしばしば促していた。飽くまで「面白い事件ばかりをザツと書く[6]」ことに終始することを戒めており、事件性の有無を断じるわけではないが、結果として描写に優れ「無解決」な作品が高評価となっていた。

今日にあっても「面白い」作家に属する谷崎潤一郎、

彼が駆け出しの頃にも、花袋は批難交じりに「この作者は奇なもの、めづらしいもの、面白いものをわざ〳〵さがし出して、書かうとしてあるやうな処がある」[7]と評している。徹底して、他人に対しても「面白い」ということを戒めていたわけだ。

さて、ひるがえって、花袋自身は後世の（というか同時代の人々からも）〈面白くない〉扱いをされる作品を量産していき、そんな彼と共に、藤村が、秋声が、歩んでいく。そこに追随しながら、独特のシニカルさをもって彼らを眺めていた人物がいた。眺め、見届け、やがて彼らを語り継ぐことになるその人物は、正宗白鳥。彼の自然主義観の中に、今日の我々が自然主義に接する意義の、あるヒントが見出せるかも知れない。

三

正宗白鳥が読売新聞社（当時の日就社）に入社したのは一九〇三（明治三十六年）年であった。白鳥は文化面を担当すると共に新聞小説の選択にも関与していた。以後、彼が退社までの七年間で、同紙の小説欄に抜擢された主な作家は、いずれも文学史において「自然主義作家」に分類される人々であった。

時は過ぎ、一九五二（昭和二十七）年。戦後、平和条約が発効され、日本が主権を回復したはずのその年、「ますます世知辛くなってい」く世相を傍観しながら、白鳥は「新聞小説の回顧」[8]という記事を『読売新聞』に寄せた。それは先述の七年間を追想したものだった。

曰く、『魔風恋風』で人気を博した小杉天外が、『コブシ』『長者星』においては「成功しなかった」のを見た白鳥は、次なる書き手に花袋を指名する。そうして連載されたのが、花袋の長編三部作に数えられる『生』であった。

花袋の『生』は、作者自身の家族・家庭がモデルにとられたもので、母の介護と死をめぐる親族間の軋轢や感情の浮き沈みが中心となる。夫亡きあと、父権を代理する中で気難しくなる母、その「犠牲」になる家族たち。身内の情はありつつも、やがて「長い看護に全く疲れ果て」ていく家族――なかんずく女性たちの姿を浮き彫りにしている。また、次男が

母の死を普遍化して「人間の儚さ」「浅ましさ」を確認する感慨を「自己の感情に泣い」ていると一蹴するなど、平淡に、客観化する書きぶりにも見るべきところはある。しかし、毎日毎朝読まれる新聞連載として〈面白い〉かどうかは別の話。確かに、リアリズムを徹底させようとした作品ではあろう。だが完結後の紙上合評において岩野泡鳴が「何処にもある事、誰にも経験のある事」が「単純」に現れ過ぎていると苦言を呈した[9]ように、ありふれた記述の集合であるとも取れる。あるあるネタに共感することで感興を得ることはできよう。けれどあるあるネタをひねりなく連ねるだけでは芸術にはなるまい。

さて、白鳥の回顧に話を戻そう。白鳥は『生』が「新聞に『私小説』の出た最初」だと指摘しつつ、それが「次の日を読者に待たせるような」ものではなかったと言う。だがそれは単なる否定ではない。

花袋は無頼の正直一徹の作家であったが、小説は面白く書くべきものではないと、自己流に考えていた。新聞小説として、次の日を読者に待たせるような執筆態度は彼の採るところではなかった。「小説は面白くってはいけない」という彼の態度は、今考えても私はそれを甚だ面白いと思っている。日本の文学史にも、多分世界の文学史にも例を求め難い事である。

白鳥は、奇妙な形で称賛している。「小説は面白くってはいけない」。既に紹介した花袋の方針を大胆に単純化したものだ。こうした言い方をするときに切除されるひだはあるが、その上で白鳥は、だからこそ「面白い」という逆説を用いた。

白鳥は次いで「徳田秋声の『足跡』が読売に出た」と述べる。秋声もまた「読者を面白がらせようとする考えは起さなかったらしく、『足跡』は『生』以上に読者受けはしなかったらしい」。だが読売新聞社は「しまいまで自由に、面白くないまゝに書かせた」のだという。続く小栗風葉『青春』は「力及ばず失敗した。兎に角読者受けはしなかった」。真山青果が『死にざま』という「色も艶もない陰気な、極めて面白くないものを書いた。しかも作者の不始末から中止された」。

続いて白鳥自身が『落日』を書いたという。「無論

読者の思惑など考えず、自分が面白くない日を送っているのだから、面白くないものを、偽装的面白がりをしないで書こうとした」のだという。現実は「面白く」はない。生活は「面白く」はない。それを誇張せずに、偽装せずに書いたというわけだ。最後に、藤村の『家』について言及される。このくだりは「面白い」ので引用しておこう。

それから面白くない小説が幾つか出たが、最後に、島崎藤村に執筆依頼をした。私は柳橋の色町のほとりにしょんぼり住んでいたこの作家を訪問して、二人で不景気な話をぼそぼそしながら、新聞小説寄稿の件が纏ったのだが、これが例の「家」なのだ。この作家も面白いものを書こうと企てゝはいず、私の方からも「面白いものを書いて下さい」なんて、不量見な事は一言も言わなかった。

「例の『家』」、つまり藤村の代表作として高名な作の執筆経緯が、いかに「面白く」なかったかと白鳥は愉快に回想しているというわけだ。「『家』が読者受けなんかしないまゝめんめん続いているうちに」、新聞社の社長交代があり、白鳥は「追放」されたのだという。

――ところが、この白鳥の回顧は、錯誤がはなはだしい。白鳥は、一般的に「前期自然主義」に分類される小杉天外の失敗後に、花袋たち「後期自然主義」の作家が現れたように書いているが、実際の連載順はそうではない。連載が最も早かったのは風葉の『青春』（一九〇五年三月五日～一九〇六年十一月十二日）、その次が天外の『コブシ』であって、これは一九〇六年三月十七日から一九〇八年一月二十日まで、ほぼ二年にわたっている。次いで花袋の『生』（一九〇八年四月十三日～七月十九日）、青果「死にざま」＝『死態』（一九〇八年七月二十日～十月二十日）、天外『長者星』（一九〇八年九月十日～一九〇九年八月八日）なのである。白鳥『落日』（一九〇九年九月一日～十一月六日）、藤村『家』（一九一〇年一月一日～五月四日）の順序は合っているが、秋声の『足跡』はそれよりも後（一九一〇年七月二十日～十一月十八日）である。[10]

白鳥の記憶違い、と言えばそれまでだが、結果的

に白鳥は、自然主義の代表的作品を並び立てることで、その発展史を描き出している。と同時に、それら文学史に刻印された作品のどれもが、いかに「面白く」なかったかを証言する。先の引用部において、「しょんぼり住んでいた」藤村を訪ね、「不景気な話をぼそぼそしながら」小説を依頼した、と仔細な回想がなされるのは、白鳥と藤村が置かれた生活――「面白くない日を送っている」という実感と、そこから作品が生まれる必然性を強調する作為と言える。

白鳥は最後にこうまとめている。

私の在職七年間「面白くない小説」が新聞紙上に続出したことは今から見ると、新聞小説史上、特筆すべき異例のことであった。私はそれを面白いと思っている。独りで痛快にも感じている。

それを「痛快」に思えるのは、一九五二年の日本では自分「独り」かも知れない。そのような「異例」の時代は、もう来ないだろう。白鳥の目の前に広がる戦後日本は、もはや「面白くない」ことが許されぬ時代であった。

四

自然主義作家たちは、それまでの文学に見られた文章の修飾や不自然・非科学的な展開を排除しようとした。白鳥に言わせれば、彼らはわざわざ小説を「面白くな」くすることに力を注いだということだ。確かにそれは、文学史上「異例」のことだったかも知れない。

なぜ白鳥は「面白くない小説」が続出していた自然主義の季節を「痛快にも感じ」るのだろうか。白鳥がこの記事を寄せた一九五二年の世相から考えてみてもよいかも知れない。

一九五二年に日本の主権回復が成ったことは前述した。同時に日米安保条約により在日米軍が置かれ、日本の再軍備も懸念された。それらに反対する左翼学生による運動は、五月一日「血のメーデー事件」で初の死者を出す。五月二日の『読売新聞』でも、「メーデー暴動化す」の記事は、ものものしく一面を飾った。その後も六月の「吹田事件」、七月の「大須事件」など、デモ隊と警察の衝突が立て続けに起こる。戦後日本の「独立」は決して明るいものではない。血

みどろの再出発だった。

「新聞小説の回顧」に、白鳥はこう書く。新聞小説は「毎日々々読者を惹きつけるものであらねばならぬようになっ」た。読者の「御機嫌を取」り、「そこには是非善悪の批判を容れる余地」もない。いや、新聞小説だけではない「政治、外交、経済などの方面でもそう」なのだ。「どの方面でも世はますます世知辛くなっている」という冒頭の言葉は、「余地」、余裕をなくした時代を指している。もちろん、彼の傍らでは実際の闘争が行われている。各々の参加者にとってみれば、それらは切実な、血を流すに値する問題であったろう。白鳥は積極的に反論しない。老いた白鳥は、自分の言うことは「閑人の痴呆的空論」なのだと自嘲する。花袋を、秋声を、藤村を、多くの友を見送り、大戦を生き延びた白鳥は、社会に、新聞に「面白くない」世界を書き付ける余白があった時代を、ただ思い出す。

白鳥の前に広がる現実は、血塗られている。それを忘れさせるかのように――事件記事と娯楽が共存するというグロテスクなメディアの中で――読者に「面白い」新聞小説が提供されている。「新聞小説の回顧」をしながら、白鳥は一九五二年の「世」と対峙している。

五

そもそも「面白い」とは何なのだろうか。白鳥が「面白い」というときも、娯楽的なサスペンスやスペクタクルをのみ指したのではなかろう。そこには芸術的な感興、といった意味も含まれている。

しかし、「面白い」という感情にはしばしば、自らが既に持つ価値観にそぐう、安心できるという心理が忍び込んでいる。ハンス・ヨーベルト・ヤウスいわく、[11] 娯楽作品は世間の「支配的な趣味傾向が枠組となっているようなさまざまな期待を満たすものに他ならない」、すなわち「慣れ親しんだ美の再生産の要求を満足させ、なじみの感じ方を保証し、望み通りの考えを是認」する。作品は我々の期待する興奮、笑い、感傷――既に見知っている、慣れ親しんだ「感じ方」を与えてくれる。また作品は我々の、善を信じ悪に怒る「考え方」を肯定してくれる。そして「日

常的ではない経験を〈センセーション〉として」「あるいは道徳的な問題として掲げ」てくれ、その問題に「解決」を示すが、その解決は多く、我々が親しんできた道徳観の範囲を出ない。これはいわゆる「娯楽」を表明する作品に限らない。過去の作品が古典化して社会と馴染むうちに、いわゆる芸術的作品もまた、我々に馴染みを与え、同様の結果を生むだろう。

だから「面白い」という観念は、しばしば余裕のなさのあらわれだ。即座に期待を満たし、安堵させてくれる。自分たちが考える美や感動から大きく外れないから、ストレスがかからない。自分の常識、善悪の基準を出ない「解決」が示されれば、明日からも同じ常識と基準を持って生きていける。それが「面白い」のだけれど、では常識や善悪が自分でない先人や社会に決定されていることについて、我々はどれだけ意識できているだろうか。

その面白さは、自分固有のものか？　誰かに決められた面白さではないか？　そのような疑問を持つとき、「面白くない」ものに敏感になることこそが必要なのではないだろうか。

「面白くない」ものに触れるとき、我々は自らの「面白い」と思う感性を相対化する機会を得る。なぜ「面白くない」のか。それは我々の日常を支配している「支配的な趣味傾向」と異なるからだ。こう感じたい、考えたいという期待を裏切るからだ。なぜ裏切ることが起り得るのか？　――我々の「感じ方」も「考え方」も、唯一絶対のもの、普遍的なものではないからだ。ではなぜ我々はこのような「感じ方」や「考え方」をするに至ったか？　――社会が、政治が、経済が、親が、教師が、友が、そう教育してきたのだ。

自らが置かれた環境に、透徹した理解をしなくても構わない。自分の「面白さ」を少しでも疑う機会になれば、それで良い。そんな機会を得たところで、自然主義文学は「面白い」ものには変わらないだろうが、それで良いのだと考える。そうあったとき、自然主義文学は、真にあだ花、踏み石、かませ犬になれるだろう。

白鳥の回顧も、まさにそうした意図を秘めたものであったろう。そこに、今日、なお自然主義文学を読む意義もある。

小説をわざわざ「面白くない」ものにした自然主義作家たちの骨折り。それは現在、位相を変えて我々を立ち止まらせる。我々はイヤイヤながらそれを読む。我々の「面白い」という観念と闘うために。そのような意味では、「小説は面白くってはいけない」。

注

1. 他、同時期の田山花袋『少女病』（一九〇七年五月）については七名が扱っていた。総じて「気持ち悪い」という評価だったが、主人公の人格や筋への注目が多く見られた。
2. こうした「お大」の「言葉遣い」への着目自体は重要である。第一声の強烈さが導入となる技法は、まさにこの時期の秋声作品を特徴づける。『徳田秋声全集　第六巻』（二〇〇〇年一月、八木出版）の解説として石崎等が寄せた「さまざまな『声』」にもそうした指摘がある。
3. 『太陽』第十巻第三号（一九〇四年二月、博文館）
4. 田山花袋「三階にて」（『早稲田文学』第五十五号、一九一〇年六月、金尾文淵堂）
5. 田山花袋「文章新話」（『文章世界』第八巻第四号、一九一三年三月、博文館）
6. 田山花袋「懸賞小説の評」（『文章世界』第二巻第十二号、一九〇七年十月、博文館）、こうした評を受けた投書家たちは事件性の希薄な小説を投稿し続け、それは『文章世界』傑作選『二十二篇』（一九一〇年一月、東雲堂）のような〈面白くない〉作品集を生む。
7. 田山花袋「近頃読んだ小説についての感想」（『文章世界』第七巻第七号、一九一二年五月、博文館）
8. 正宗白鳥「新聞小説の回顧」（『読売新聞』、一九五二年六月二十三日朝刊）、恐らくは六月五日に「第三十九回読売文化教室」として催された「新聞小説の夕」（同日朝刊に広告あり）での講演に基づくもの。
9. 岩野泡鳴・柳田国男・蒲原有明・水野葉舟「『生』の合評」（『読売新聞』、一九〇九年一月十七日日曜附録）
10. その間にも黒法師（渡辺霞亭）『突羽根』（一九〇七年一月一日～十月十二日）や徳田秋声『凋落』

（一九〇七年九月三日～一九〇八年四月六日）、水野葉舟『微温』（一九〇九年八月十三日～九月十七日）などが挟まっている。これらが「幾つか出た」「面白くない小説」に相当するのであろうが、いずれにせよ順序は無茶苦茶である。

11. H. R. ヤウス（轡田収訳）『挑発としての文学史』（二〇〇一年十一月、岩波書店）